沖縄戦の経験

2B

私は、祖母に戦争の話を聞くことができました。祖母の名前は清元和子で、現在は八十四歳、戦争を体験したときは七歳で、小学校二年生でした。当時、祖母は沖縄に住んでいたため、祖母は沖縄戦を経験しました。

一九四五年三月二十六日、米軍は慶良間列島に上陸し、沖縄戦が始まりました。四月一日に沖縄本島に上陸し、三か月にわたって激しい地上戦がつづきました。日本軍は、沖縄で玉砕しそれで戦争を終わらせるつもりだったそうです。

沖縄本土の戦闘に備え、女性や子供、老人は九州に疎開しました。祖母の母の妹が小学校の先生だったため、彼にアメリカ軍に攻撃されて沈没してしまった対馬丸に引率として乗ることが決まりました。祖母もついていく予定でしたが、なぜか予定が変更され、二人とも本土に残ることになりました。

一九四四年十月から空襲が始まり、祖母の住んでいた本部町では、十、十空襲で弾薬の倉庫があった警察が攻撃され、飛び

三〜四つありました。兵士は、戦闘の激しい南部に移動していたため、兵舎は空でした。

さらに自分が食べる分の米などを持って、八重山の奥に行くと、道に兵舎が

たが、残っていた見張りの兵士が二人、さくなっているのを見て、危ないので別の場所に逃げようとしました。その途中で、白い蛇がいて道をふさいでいました。山奥では蛇を見ることはめったになく、白い蛇も初めて見たので、とても驚いたそうです。そして、戦争が激しくここまで逃げても危険なら、自分の見知ったところに行きたいと考えて、兵舎で一夜過ごし、全員で避難小屋にひき帰しました。そのあとすぐ、米軍が上陸しました。

アメリカ軍の占領後、本部半島の住民は強制移動させられ、祖母は親戚と十六キロもの距離を歩いて、辺野古の隣の大浦崎へ移動しました。大浦崎では、木も生えないはげた丘にテントを一つ与えられ、中に何家族かがいる状態でした。たまに米が配給されましたが、なくなってしまうので、雑草も根まで入れておかゆにしたそうです。

大浦崎に移動してすぐ、女学校を卒業した人たちが、「モノはうばわれても教育はうばわれない」と言って先生になり学校をはじめました。祖母は国語、算数と、読み書きを教わりました。

祖母は、小学校の仮に入る高等科の人と話しました。高等科は、招集され、戦闘の激しい南部へ弾薬を運んでいるとしていました。

部隊によって内容がちがい、祖母が話をした人は、弾薬を運んで帰りに、兵士にかつおぶしをもらいかつおぶしをゃぶりながら本部へ帰りました。しかし、別の人は、手榴弾を渡され、つかまる前に自分で死ねといわれたそうです。これは、当事の日本では当たり前の考えでした。

祖母が本部に帰ってくると、兵隊が占拠していた民家は焼かれ、大きな屋敷だった祖母の家には、爆弾で穴が空いていました。そのためしばらく小屋に家族で過ごしました。手榴弾を持った日本の兵士が食料を要求することがあり、まだ恐わっていないと感じたそうです。

感想

小学校二年生だった祖母や、三歳だった祖母の妹が、十六キロもの距離を歩いて移動しなければならなかったことや、私と同じ年の高等科生が、戦闘の激しい南部に弾薬を届けに行ったり、手榴弾を渡されたりしたことを知って、他人事のようだった戦争中の生活を具体的に理解できて、今の生活が平和であることを実感しました。戦争のことは知らなければならないなかったし、忘れてはいけないことだと思いました。